

本物の勝利へ 應!

2009年シーズン、我が慶應義塾体育会バスケットボール部は、新チームでの初陣となる慶應定期戦にて、アウェイの重圧に臆することなく2連勝を飾り、関東大学トーナメントでは長年の悲願であった40年ぶり5回目の優勝を成し遂げた。勢いそのままに秋のリーグ戦に臨んだが、そこでは惜しくも準優勝。続くインカレでは、決勝戦でリーグ時に二連勝で押しつけた日本大学に敗れ、悔しくも全日本二連覇の夢が叶うことはなかった。とは言っても、その実力は間違いなく日本トップレベル。確かな自信と、塾代表としての誇りを胸に、勝負の年を戦い抜く!

に引き戻し、来年度の勝ち越しへと確実に繋げたいところである。昨年度、あと一步のところまで涙をのんだ本塾。あの時の雪辱を晴らすために一年間積み上げてきた部員一人一人の力を、

今こそ発揮するのである。慶應義塾の最大の持ち味である「一体感」は、尚のこと健在。全員が役割を果たし、価値ある勝利を掴み取る。

勝負の年



4年 二ノ宮康平 (No. 4)

本年度は、「One or None」のスローガンを掲げ、あらゆる面で「No.1」にこだわる。目標は、春の早慶定期戦完全優勝、秋の全日本王座奪還であるが、目の前の試合を一つ一つ着実に乗り越えて初めて、これらの偉大なタイトルを獲得出来るということをお忘れはならない。常にチャレンジャーであり続け、謙虚にひた向きに、そして学生らしく澁刺と戦い、さらなる高みを目指す。現在早慶戦の通算戦績は33勝34敗。今回何としても勝率をタイ

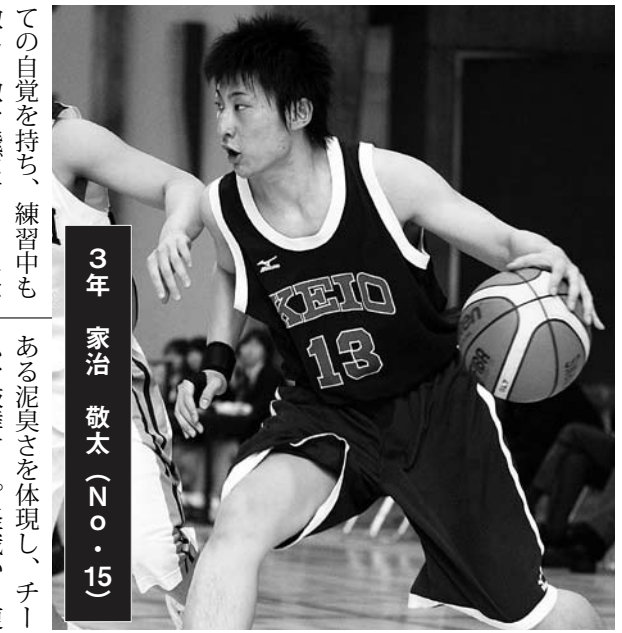
注目は何といつても下級生時よりチームの主力として活躍してきた、一ノ宮酒井、岩下の最上級生トリオであろう。大学最後の慶早戦、優勝にかけると意気込みには並々ならぬものがある。二ノ宮康平(No. 4)はキャプテン兼リードガードであり、チームの精神的柱であることは言うまでもなく、特出したゲームメイクセンスと比類なきスピードで常にハイテンポな展開

を演出する。ともすれば、自らもポイントゲッターと化する二ノ宮。チームメイクトの絶大な信頼と期待を背に、会場を熱狂の渦へと巻き込む。次に酒井祐典(No. 5)。稀代のオールラウンドプレイヤーとして、過去三年間、重要な局面で幾度となくチームを勝利へと導いてきた男。圧巻はなんと、出てきたゲームメイクセンスと比類なきスピードで常にハイテンポな展開

プレー。天性の勝負強さで、相手を黙らせる。岩下達郎(No. 7)は驚異的な支配力を誇る、日本屈指のセンター。ランニングプレーからの強烈なダンクシュート、繊細なタッチのロングシュートなど、シュートセレクションはバラエティに富み、早稲田は岩下を攻略するのに途轍もない労力を費やすことになるだろう。剛と柔を兼ね備えた、本塾の揺るぎなき大黒柱だ。金岡(No. 6)、黒澤(No. 8)、澤谷(No. 9)、丸橋(No. 10)は、最上級生ロールプレイヤー。リバウンド、ルーズボール、3Pなど、それが随所で役割を課せられている。流れを引き寄せるビッグプレーに期待したい。

飛躍する戦力

昨年度までの2年間このチームに在籍するも、なかなか出場機会に恵まれず、苦汁をなめてきた学年が3年生である。しかし、2月のシーズンインを皮切りに頭角を現してきたメンバーが非常に多く、目標達成のためには、彼らの成長が必要条件となることも事実だ。ここではそんな成長著しいメンバーを紹介したい。まず一人目は、昨年からシックスマンとしてチームを支え、今ではチームの得点源として活躍する、浪速のフィンガーローラー・家治敬太(No. 15)だ。正確無比のミドルシュートにセンスフルなアシストパスと、観る者を魅了する彼のプレイは日に日に凄味を増してきている。上級生とし



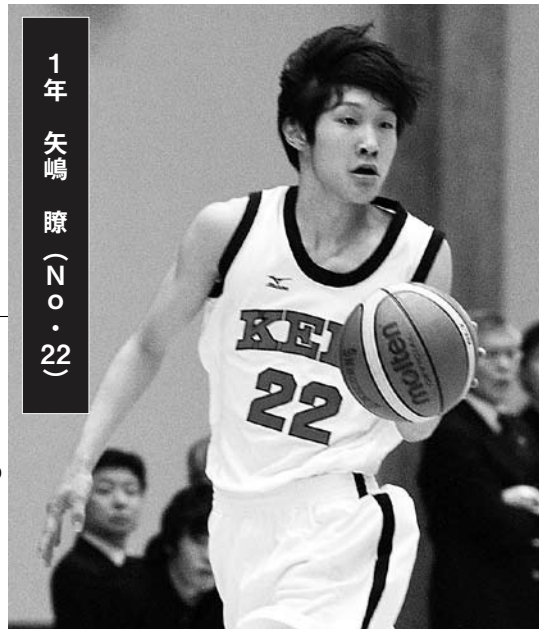
3年 家治 敬太 (No. 15)

ての自覚を持ち、練習中も激しく激を飛ばすようになった彼には、最早死角などない。この慶早戦においても、必ずや本塾を勝利に導いてくれるはずだ。二人目は、昨年度・新人戦得点王に輝いた、金子峻也(No. 12)。誰もが認める類い稀なる得点能力はもちろんのこと、今年度はPGとしてチームを引っ張る姿も板に付いてきた。私生活ではユニークな一面も見せる彼だが、ひとたびコートに降りると厳しいセカンドガード争いによって得たゲームメイク力で、仲間の力を一気に引き出していく。大きく成長した金子に期待したい。次に紹介するのは、

春本龍彬(No. 13)。高身長ながら得意のミドルシュートは入り出したら誰にも止めることは出来ず、インサイドでは華麗なステップワークで相手を翻弄する。課題の精神力も徐々に克服し、今では本塾の得点源の一人である。この他にも、鍛え抜かれた強靱な肉体を持つ松谷直人(No. 14)は、リバウンドにディフェンスと、本塾の伝統で

ある泥臭さを体現し、チームを鼓舞する。怪我から復帰した麻生慧(No. 11)も、抜群の身体能力を駆使し、起爆剤としてコートを縦横無尽に駆け巡る。彼ら二人はまだまだ伸びしろが多く、機会を得られれば必ず結果を残すことであろう。上級生となった彼ら3年生から目が離せない。2年生には、本塾の将来を担う2人のビッグマンが控える。一人目のビッグマンは、身長194cmの桂竜馬(No. 17)だ。高校時代は目立つた実績こそないものの、非凡な頭脳を備え、本塾の考えるバスケットを体現する。武器であるミドルシュートにはいつそう磨きがかかり、身長を生かしたフックシュート等のインサイドプレイも目に見張る成長を遂げた。明晰な頭脳を用いて冷静な判断を下し、チームを100%の勝利へ近づけてくれるはずだ。もう一人のビッグマンは、身長190cmの清水隆亮(No. 18)だ。高身長ながら彼のバスケットボールテクニクには誰もが驚嘆する。変幻自在のシュートはボール

超期待の新星



1年 矢嶋 瞭 (No. 22)

ハンドリング力の高さを示し、誰にも物怖じしない性格からか、どんな状況下においても怯まず虎視眈々と得点を狙ってくる。人数の少ない2年生、彼らをまとめ二人の双肩に期待が掛かる。

4月から慶應義塾の新しい仲間として加わった14名の一年生。全国各地から高い志を抱いて結集した彼らがチームにもたらす勢いは、何物にも代えがたい力である。その中でも、既に春先から即戦力として活躍しているメンバーを紹介したい。まずは、その知的な面持ちと謙虚な姿勢が印象的なクールビューティー、蛇名涼(No. 19)。練習での理解力、表現力、安定感、どれをとっても随一、会場の注目を集めること請け合いです。二人目は、圧倒的なスピードとクレバーネスが光る、矢嶋瞭(No. 22)。一つ一つの洗練された動きは観るものに大きな期待を抱かせる。淡々とした性格からは想像出来ないほどの迫力を放つディフェンスから、速攻の先陣を切る攻撃力、この男から一瞬たりとも眼が離せない。最後に、異なるタイプの大型新人、

中島祥平(No. 21)と本橋祐典(No. 23)だ。高校時代の二人であるが、代表合宿でそのポテンシャルの高さが認められ、着実に力を蓄えてきた。中島はその高身長に加え、アウトサイドシュートやランニングプレーにも秀でたユーティリティープレイヤー。本橋は、恵まれた体格を生かした力強いリバウンドが魅力の仕事人。今シーズンは、岩下の負担をいかに減らすかが大きな課題の一つとして挙げられるが、二人の貢献度は計り知れないものとなるであろう。是非とも活気漲る度胸満点の彼らに注目して頂きたい。

例年になく層の厚くなりそうな今シーズンは、正しく勝負の一年! 伝統の全員バスケットで、早慶戦優勝の座を奪還する。